

令和 6 年 5 月 30 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00367

研究課題名（和文）天人観に基づく韓愈の文学観の再検討

研究課題名（英文）Reexamination of Han Yu's View of Literature Based on his View of Heaven and humanity

研究代表者

鈴木 達明（SUZUKI, Tatsuaki）

愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：90456814

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、韓愈の天人観について再検討を行い、それが天人相関説の伝統的な枠組みを保持しながらも、天は人とは異なる価値観を持ち得るものとして捉えた特異なものであることを明らかにした。更にこの知見を用いて、「孟東野を送る序」について論じ、従来注目されてきた「不平」の文学論の他に、文学を天によって人が鳴らされるものと捉える、文学の動機における受動性の主張（「受動の文学論」）が見られることを指摘した。その上で、この序における「鳴」字の使用法を分析することにより、修辞法と文学論の両面において、『莊子』の影響が強く認められることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、以下の二点に整理できる。（１）従来守旧的な天人相関説として捉えられていた韓愈の天人観について新しい捉え方を示し、従来の柳宗元・劉禹錫を中心とした中唐の天人観の議論に新しい視角を提供した。（２）天人観に基づく分析により、「孟東野を送る序」に、「不平」の文学論の他に、西洋の靈感論にも通じる特異な「受動の文学論」の考えが見られることを明らかにし、それが韓愈の『莊子』の受容によってたらされた可能性を示した。

韓愈は、日本の教科書にも取り上げられる重要人物であり、その基本的な思想や文学観について新しい見方を示したことは、社会的な意義を有する。

研究成果の概要（英文）：In this study, we reexamine Han Yu's view of Heaven and humanity and then analyze how it forms the foundation of his literary perspective.

Han Yu preserved the framework of the idea that a correlation exists between Heaven and humanity. However, a highly distinctive feature of his view was that within this framework he considered Heaven to possess likes and dislikes that differed from those of human beings. Using this understanding of the relationship between Heaven and humanity, I examined the "Song Meng Dongye xu", known for the keyword "不平則鳴." Previously, this text focused on the literary critique about "不平 (lack of equilibrium)". Still, we pointed out a more significant assertion: the idea that literature is an expression through humanity by Heaven, highlighting a passive motivation in literature inspired by divine influence. Furthermore, based on the usage of the character "鳴 (sound)", suggests the influence of Zhuangzi on both Han Yu's rhetoric and his literary theory.

研究分野：中国文学

キーワード：韓愈 天人観 不平則鳴 莊子 唐宋変革 古文運動 靈感論 天人相関

1. 研究開始当初の背景

8世紀の後半から9世紀にかけての中唐の時期は、政治・経済・社会・文化にわたる総合的な変革である「唐宋変革」の萌芽期に当たる。韓愈は、文学では古文運動の提唱者、思想においては宋代の新儒学の先駆者として、この時期に文学・思想の両面において新しい潮流を生み出した人物と評価されている。

この韓愈の文学的主張については、いわゆる「載道の文学」の考えから説明されるのが主流であった。すなわち文学の役割は、それによって儒家の「道」を表す（「道を載せる」）ことにあると考え、当時流行していた文体ではその役割を十分果たせないため、達意の文章である「古文」の復興を提唱し、実践したとする説明である。韓愈が提唱した「道統」の考えは、宋代の儒学に大きな影響を与えており、載道の文学は韓愈の文学と思想を結びつけて宋代へと接続するものとして重視されてきた。

一方で、文学批評の観点から論じられてきた韓愈の文学の特質は、必ずしもこの載道の文学と整合的であるとは言えない。すなわち、人は不遇な状況下でこそ優れた文学を生むという「不平」の文学論や、その実作品における、「逸脱の文学」とも言うべき難解・過剰・逸脱の方向性を持った特質である。これらの特徴を載道の文学と結びつけ、包括的に説明することができる文学観は、現在なお見いだされていない。

本研究は、この問題について、「天人観」（天と人の関係性に対する考え）という観点から解決を試みたものである。この天人観も、唐宋変革の中で大きく変容し、新儒学を生み出す重要な要素として、研究が蓄積されてきた。ただし、中唐時期においては、これまで柳宗元・劉禹錫の合理主義的な天人観に議論が集中し、韓愈については、守旧派の代表として柳・劉の新規性を説明するために対比的に扱われるに止まっていた。それに対して報告者は、柳・劉との対比という問題とは別に、改めて韓愈の天人観の検証が必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、天人観を鍵として載道の文学や「不平」の文学論、「奇」の追求（文学における逸脱の重視）といった、韓愈の文学における特徴として指摘されてきた諸要素を包括的に説明できる文学観を究明することを大きな目的とする。それに向けて、韓愈の「天人観」の独自性を分析し、その文学論との関係性や思想史的な位置づけを行うことを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、以下の三つの研究方法を軸として、段階を追って検討を進めた。

（1）韓愈の天人観の再検討

韓愈の天人観は、本研究の鍵となる概念である。「研究開始当初の背景」でも触れたように、中唐期の天人観については、これまで伝統的な天人相関説を否定する合理主義的な柳宗元・劉禹錫の天人観が議論の焦点となってきた。韓愈は、それに対する守旧派の代表として扱われ、その分析も柳宗元の「天説」や劉禹錫の「天論」での言及に重きが置かれていた。それに対して、本研究では韓愈自身の作品に基づき、従来の議論ではあまり扱われてこなかった文章や詩作品をも用いて、その天人観を分析した。それに当たっては、合理か非合理か、天人相関か否かという対立軸に拘泥せず、唐宋変革での天人観の変化の中での位置づけに注意して検討を進めた。

（2）天人観による「不平」の文学論の基礎づけの検討

古文運動の主導者として、宋代以降の文学に対する韓愈の影響力は極めて大きく、「孟東野を送る序」に見える「不平」の文学論もまた、その受容における重要な議論的となってきた。しかしながら、天人観の角度からこれについて論じられることはこれまでほとんどなかった。その原因の一端は、従来の天人観の把握が限定的であったことにあり、実際には「不平」の文学論もまた、天人観によって基礎づけられている面があると考えられる。そこで（1）における天人観の再検討の結果を用いて、「不平」の文学論をはじめとする韓愈の文学観について改めて検討を行った。合わせて、その文学観を反映すると考えられる、実作品における「逸脱の文学」的な性質についても、天人観に基づく説明を試みた。

（3）天人観を鍵とする、包括的な文学観の考察

韓愈の文学を包括的に説明する文学観の究明に向けて、まず文学や創作活動に対する天のはたらきの捉え方から韓愈の天人観についての分析を深化させ、その上で、天人観が「載道の文学」をいかに基礎づけているかを考察することで両者の接続可能性を探り、文学批評史や思想史上の位置づけを検討する。天人観と載道の文学とは、宋代の新儒学への影響という点において共通性を持つことから、両者の接続可能性は十分あり得ると考えている。

4. 研究成果

本研究の基礎となる、韓愈のテキストの精読に関わる成果として、『韓愈詩訳注』第三冊の

刊行がある。2015 年に第一冊が刊行され、全五冊を予定する継続的な学術研究事業であり、複数の研究者による検討により、韓愈の全詩作品を翻訳し、学術的な注釈を付けたものとして、広い範囲にわたって利用価値のある研究成果と言える。この基礎となる研究会は、コロナ禍で一時期中断したものの、本研究課題の実施期間中も進められ、全詩の検討を終えることができた。成果は今後も引き続き刊行される予定である。

以下の項目の数字は上記の「研究の方法」と対応する。

(1) 韓愈の天人観の再検討に関する成果が、論文「韓愈の天人観について 天人好悪相異の説」である。この論文では、改めて韓愈自身のテキストに基づき、その天人観について検討した。その結果、韓愈の天人観は、有神論や天人相関説などの伝統的な立場を保持しつつも、不遇の責任を天に帰すことで人の責任を回避するという目的のもとで、天を人間とは異なる好悪を持ち得るものとして捉える特徴を持つものであることを明らかにし、「天人好悪相異の説」と名づけた。

この知見により、いくつかの詩文や『論語筆解』に見える特異な天の形象について整合的な説明が可能となった。また従来韓愈の天人観を論じる時の基本資料とされてきた柳宗元の「天説」に見られる韓愈の所説について、韓愈の天人観が含む矛盾を批判的に示すために柳宗元が創作した可能性が高いと考えられることが指摘できた。天人相関の枠組みを維持しつつ、その中で人と「好悪相異」するものとして天を捉える態度は、古文運動において「今」と対立する価値概念として「古」を捉え直した態度と似る。そこから考えれば、この天人観は単にそれ以前の天人相関説をそのまま保持したものを見なすべきではなく、中唐期における天人観の揺らぎの中で、韓愈が自己の正しさへの確信を守るため、「人」と対置される価値概念として「天」を新たに捉え直して構築されたものと考えることができた。

(2) 韓愈の天人観について新たに得られた知見から、その文学論について論じた成果が、口頭発表「韓愈「孟東野を送る序」の「鳴」について」及びそれに基づく論文「韓愈「送孟東野序」の「鳴」と受動の文学論」がある（後者は次の(3)とも関わる）。

韓愈の「孟東野を送る序」は、「不平則鳴」というキーワードで、均衡を失った状態こそがすぐれた文学を生むという「不平」の文学論を説く文章として著名である。ただ、天人観の観点から見れば、文学を天によって人が鳴らされるものとする、文学の動機における受動性の主張がより注目される。この文章が書かれた本来の意図から考えても、重点はむしろそちらにあると考えられる。この観点に立つと、「不平則鳴」の「鳴」が重要な概念として浮上する。「鳴」が人間の言葉を直接指して用いられることは極めて珍しく、その使用法に注目して唐代以前の用例を検討することによって、『莊子』に韓愈の用法の起源が求められる蓋然性が高いことがわかった。『莊子』には、言葉における人の主体性への疑念や「道」に対する万物の受動性の考えが多く箇所に見られる。韓愈は『莊子』から修辞上の工夫として特殊な「鳴」の用法を取り込むと同時に、文学の受動性の主張についても影響を受けたのではないかと考えられた。なお、『莊子』の研究と関連したものとして、『莊子』についての複数の訳書を著した野村茂夫氏が 2021 年に亡くなられたのを受けて、その訳注を比較し、学術的意義について考察した。口頭発表「野村茂夫先生の莊子訳と教学」及び論文「野村茂夫先生の訳業 - 『老子』『莊子』を中心として - 」がその成果である。

「孟東野を送る序」について、近年の文学研究では「不平」に議論が集中していた。本研究で、受動の文学論という主張が見いだせることを新たに指摘できたことは、一定のインパクトを持つ成果だと考えている。また天人観・文学観における『莊子』の影響の指摘は、広く中唐時期における先秦諸子の受容という問題にも繋がるものである。

(3) 本研究の最終的な目標である、載道の文学を含めた包括的な文学観の究明については、萌芽的な成果を、上記の論文「韓愈「孟東野を送る序」の「鳴」について」の中で述べた。

先行研究において、人間の文学が造物者の世界創造と拮抗するはたらきを及ぼすという考えが韓愈とその周辺に見られることが指摘されている。(2)で見いだした「受動の文学論」は、一見すると天人関係における人の評価において、この通説と逆行するようにも見える。しかしながら、人が外在の他物からのはたらきを受けて芸術を生み出すという従来の感物説と比較すると、受動の文学論では、天と人とは、直接対峙する関係性にあると理解することができる。万物の一つとして天の下に置かれる位置から、天と直接向かい合う位置への変化という点で、受動の文学論も、従来の研究における指摘と整合的に、当時の天人観の変化の中に位置づけることが可能であると考えられる。

本研究は、韓愈の天人観を、従来の天人相関か否かという問題設定とは異なる角度から分析し直すことによって、文学観についても新たな知見を得られることを明らかにした。この成果は、中唐時期、ひいては唐宋変革における天人観の変化は、天と人との単純な綱引きの構図に

とどまらず、例えば両者の役割や枠組みの変化のように、より多角的に捉え直される必要があることを示している。載道の文学までを含めた包括的な文学観については、更に分析を進める必要があるが、それに当たって天人観という鍵概念の重要性を示せたことは確かであろう。その成果は唐宋変革全体における天人観・文学観の変化の再検討にも寄与するものと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鈴木達明	4. 巻 82
2. 論文標題 野村茂夫先生の訳業 - 『老子』『莊子』を中心として -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 國語國文學報	6. 最初と最後の頁 93-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木達明	4. 巻 96
2. 論文標題 韓愈の天人観について 天人好悪相異の説	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国文学報	6. 最初と最後の頁 33-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木達明
2. 発表標題 韓愈「孟東野を送る序」の「鳴」について
3. 学会等名 日本中国学会第74回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木達明
2. 発表標題 野村茂夫先生の莊子訳と教学
3. 学会等名 阪神中哲談話会第405回例会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1．著者名 成田健太郎・宋吟・陸穎瑤・池田恭哉・乾源俊・和田英信・川合康三・鈴木達明・好川聡・遠藤星希・伊崎孝幸・宇佐美文理・緑川英樹・浅見洋二・永田知之・西上勝	4．発行年 2024年
2．出版社 研文出版	5．総ページ数 -
3．書名 中国の詩学 を超えて	

1．著者名 川合康三・緑川英樹・好川聡編	4．発行年 2021年
2．出版社 研文出版	5．総ページ数 481
3．書名 『韓愈詩訳注』第三冊	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------